

第2学年 「はさみのあーと」

1 単元計画（全3時間）

時間	学習活動
1	はさみで思いのままに切ることを楽しみ、切った形を並べて面白い形を見付ける。
2	並べた形を基に、自分の表したいことを考え、切り方や並べ方を工夫して表す。
3	活動を振り返って、作品を見合い、自分達の作品の面白さや楽しさを味わう。

2 ねらい

- ・はさみで紙をどんどん切ったり、できた形を並べて表したりするときの感覚や行為を通して、いろいろな形や触った感じなどに気付けるようにする。手や体全体の感覚などを働かせ、表したいことを基に表し方を工夫して表すことができるようにする。
- ・はさみで紙を切ることや、できた形から感じたことや想像したことから、表したいことを見付け、好きな形を選んだり、いろいろな形を考えたりしながら、どのように表すかについて考えることができるようにする。
- ・楽しくはさみで紙をどんどん切って、できた形を並べて表す活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活をしようとする姿勢を育てる。

3 学習活動の実際



はさみで思うままに紙を切り、切ってできるいろいろな形を見付けている。



切った紙を並べながら、表したいことを見付けている。



好きな形の紙を選び、何度も並べ替えながら、どのように表すかについて考えている。

4 成果と課題

①育成する資質・能力を明確にした指導計画の工夫について

本題材は、はさみを使って紙を自由に切る活動が中心となる。低学年の児童にとってははさみは最初の刃物である。1年生の頃から日常的にも使っているが、安全な取り扱いができるよう、活動の中でも全体や個別に安全指導を繰り返し行った。学級の中にははさみを扱うことがあまり得意ではない児童もいる。そんな児童にも思いのままにはさみで紙を切る心地よさを味わったり、生まれてくる形の面白さを感じ取ったりして活動を楽しんで欲しいと思い、



授業の導入では、教師がはさみを思いのままに動かして切ったり、切った紙を台紙に置いて見たりする活動を演示し、手や体全体の感覚を働かせて切ることを伝えることから始めた。また、切る行為やできた形をオノマトペで表すことで、切り方や切ることができる形を想像したり、体の動きやリズムから生まれてくる形の面白さから発想を広げたりできるようにした。さらに、教師が切って置いた紙を何人かの児童に自由に並べ替えてもらい、その見え方の面白さをみんなで共有した。そうすることで、はさみで切ることへの興味がわき、いろいろな切り方で面白い形を作ってみたいという意欲付けとなった。

②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について

長方形や正方形などいろいろな大きさや形に切った紙を十分に用意し、思い付いた切り方をどんどん試しながら紙を切る感触や音などを捉えられるよう、いろいろな切り方を試す時間を確保した。すると、「ギザギザ」「くねくね」などつぶやきながらはさみで切ることを楽しむ児童の姿が見られ、「ふわふわ」「シュー」など自分なりの新たな切り方を思い付き、表現する児童の姿も見られた。そして、切った紙の形から「階段みたい。」「クワガタのはさみみたい。」「おもちゃみたいになったよ。」と言いながら、そこから生まれるいろいろな形の面白さを感じているようだった。



児童達が互いの様子を自然に見ることができるように、教室の机の配置をコの字型にして中央に材料を置くようにした。材料を取りに移動するときだけでなく自分の席で作業しながらも、友達が紙を切っている様子や、つくりつつある作品を見ることができるよう。すると、立ち止まって友達の作品に目をやったり声をかけ合ったりと、自然に児童同士の交流が生まれたことから、児童の見方や感じ方を広げる手立てとなったのではないかと考える。



③指導と評価の一体化の工夫について

授業の途中に全員での鑑賞会の時間を設けた。児童が、切った紙を台紙に並べ、のりで貼り付ける前の段階での鑑賞会である。児童は、友達が切った紙の形や並べてできた形にとっても興味をもち、「この形、面白いね。どうやって切ったの?」と質問をする児童や、「これ、〇〇みたい。」「この形、こっちに置いてみたら。」などと、自分が感じたことを伝えたり、新たな発想や構想を提案したりする様子も見られ、生き生きとした交流が生まれた。鑑賞会の後には、友達からのアドバイスを参考にしながら、さらに紙を切り進める児童や並べておいた紙の向きを変えてみたり、回転させたり、裏返して置いてみたりとさらに試行錯誤して製作を進める児童の姿が多く見られた。そして、「どんなふうに切ろうかな。」「どう並べようかな。」と迷っていた児童にも新たな気付きを得るきっかけとなったのではないだろうか。しかし、仕上がった作品の中には、貼り合わせた紙の枚数が少なく、切り方が単調な作品がいくつか見られ、そういった児童の振り返りから、思うように切ることができなかったことや友達と自分の作品を比べてしまい、思うようにいかなかったことにもどかしさを感じていたことが分かった。教師は、児童が手がけている行為や生まれてくる形などに共感的に寄り添い、児童が安心して試行錯誤したり、互いによさを認め合ったりできる環境作りや個への関わりに十分に配慮する必要があると感じた。



④ICTの効果的な活用について

タブレット端末を使って仕上がった自分の作品を写真に撮り、最後の鑑賞会で活用した。自分の作品の面白い部分やお気に入りの部分を伝える際に、切り方や並べ方などの工夫も伝え合った。言葉にして伝えることで、制作過程を振り返ったり作品への自分の思いを再確認したりする機会になったと思う。また、友達の作品を見て異なるイメージをもった児童からは、「こんなふうにも見えるよ。」といった発言も見られ、様々な見方や感じ方があることに気付き、その楽しさや面白さを共感できたのではないかと考える。今回は、最後の鑑賞会での活用のみであったため、多様な場面での効果的な活用方法を探っていきたい。

第4学年 「不思議なかげの実験室」

1 単元計画（全3時間）

時間	学習活動
1	材料を組み合わせて様々な影をつくる。
2	材料の置き方や光の当て方を試しながら、イメージに合う影の形を工夫したり、偶然できた形から発想を広げたりして表現する。
3	撮影した影を鑑賞し気付いたことや感じたことを伝え合う。

2 ねらい

- ・材料の組み合わせ方や光の当て方を工夫しながら、影の形の変化や偶然できる面白さに気づき、活動に主体的に取り組む力を育てる。
- ・光と材料の関係を試行錯誤する中で、つくりたい形をイメージし、よりよい表現を目指して自分の見方や感じ方を広げることができるようにする。
- ・友達との関わりやタブレットでの共有・鑑賞を通して、表現の楽しさや喜びを味わい、自分の表現に自信をもつことができるようにする。

3 学習活動の実際

・第1時



ライトを近づけたり遠ざけたりしたら影の形も変わるよ。



面白い形を見つけたよ。重ねると、影がぼこぼこするよ。

透けて形が映る材料があるよ。



網の広がり方が面白いな。

素敵な形だね。

・ 第2時



光が透ける材料を重ねると、影の色合いが変わるよ。



どんどん材料の形を変えて積み重ねたらどうなるかな。

透明な材料を使うと、模様が透けて見えて面白いよ。



光を通す材料と通さない材料を組み合わせたらどうなるかな。

4 成果と課題

①育成する資質・能力を明確にした指導計画の工夫について

昨年度の図画工作科アンケート結果によると、第3学年では「思い通りにいかない時に、どうすれば自分の思ったようにすることができののかを考えることが好き」と答えた児童は42%であった。一方で、「あまり好きでない」「好きでない」と答えた児童は合わせて35%だった。この結果から、自分の考えを形にする過程でうまくいかない場面に直面したとき、試行錯誤することに苦手意識をもっていることが考えられる。そこで、昨年度、児童は身近にある木を使って「せかいに一つだけの筆」をつくる活動に取り組んだ。自分で選んだ木の枝に気に入った材料を組み合わせる中で、何度も思考し工夫する力を育んできている。今年度は、その力をさらに発展させ、想像を広げながら発想を連続させ作品をつくり変えていく力をつけさせたいと考えた。友達と協働しながら活動する中で、多様な表現に触れ、互いに認め合ったり、偶然できた形や影の面白さを楽しんだりできるような場づくりを意識した。「つくり、つくりかえ、つくる」という過程を通し、新しい試みをしようとすることや自由に表現する楽しさを感じられることを目指して本題材を設定した。第1時では、身近にある材料を一つだけ使って影をつくる活動を行い、形の面白さや光の当たり方による変化に気付かせた。制限を設けることで、児童からは「もっと材料を組み合わせたい」という意欲が自然に引き出された。第2時では、体育館の広

い空間を活用し、体全体を使って大きく動きながら、複数の材料を自由に組み合わせて影づくりを楽しんだ。材料同士の組合せや配置を工夫する中で、偶然生まれる新しい形や思いがけない影の広がりには驚き、さらに表現を深めていった。第3時では、タブレットで撮影したお互いの影を見合いながら同じ材料でも見え方や感じ方が異なることに気付き、それぞれの視点の違いを伝え合った。この過程を通して、児童は自分の表現に自信をもち、友達と関わりながら新しい発想を生み出す力を育んでいた。

②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について

今回の授業では、「主体的・対話的で深い学び」を目指し、児童がより自由に、意欲的に活動できるように授業の形態や環境設定を工夫した。昨年度、4年生で行った「不思議なかげの実験室」の授業ではグループ単位で活動したが、積極的な児童に作業が偏ってしまい、他の児童が自分の表現を試す機会を十分に得られない様子が見られた。そこで本年度はグループにせず、個々の児童が自由に活動できるようにした。これにより、一人一人が自分の発想を生かしながら主体的に活動に取り組めることを期待した。また、活動場所として、影を使った表現に適した体育館を選んだ。体育館には暗幕が備えられており、光と影を明瞭に映し出す環境が整っているため、児童の創造性を広げる場としてふさわしいと考えた。広いスペースで空間全体を自由に使えるようにすることで、表現の規模やアイデアの広がりも期待できた。授業の導入では、みんなで集めた材料を自由に使ってよいことや体育館のどの場所を使ってもよいことを児童に伝え、思い思いの場所で製作に取り組めるようにした。また、他の児童の活動の様子が自然に視野に入るよう、材料を囲むように活動する場を設定し、互いに刺激を受け合えるような場づくりを意識した。影を映すためには、バドミントンの支柱に不織布や寒冷紗を張ってスクリーンを設け、光がしっかり届くようにした。さらに、材料の置き方に遠近感の工夫が生まれるよう、長机を横向きや縦向きに配置し、児童自身が構成を考えながら素材を配置できるよう配慮した。活動中、児童は休むことなく造形遊びに夢中になり、それぞれのアイデアを形にすることを楽しんでいた。一方で、活動に集中しすぎたことで、友達の作品や表現に目を向ける余裕がなかったという課題も見られた。また、使用したライトの強度によって影の濃淡が分かりづらかったため、イメージが膨らませにくい様子もうかがえた。今後は、材料や環境を見つめ直すことで、児童が新しい試みをしようと主体的に活動し、自らの表現に自信をもって取り組める授業づくりを進めていきたい。

③指導と評価の一体化の工夫について

児童が自分の感じたことや考えを試し表現する造形遊びでは、児童のつぶやきや行動を観察し見取ることが重要になってくる。同じような場面でも、思考を深めているようであれば静かに見守り、活動が停滞しているようであれば他の児童の様子に目を向けさせたり「どんな形に見える。」「上から見てみる。」「見上げてみたら。」などと声をかけたりした。児童の活動の見取りと声かけについて指導者間で協議を重ね、よりよい方法を探った。また、活動配置図を作ったり、気になる場面を写真に残したりして、活動の様子を記録し評価に活かすとともに鑑賞の場面

などで提示することで、次の活動へつながるようにした。また、児童自身が気に入ったところをタブレットで写真に撮ったり振り返りをワークシートに書いたりしたことで、どこに児童の思いがあるのか思考の流れが明確になり、評価や支援の手がかりとすることができた。

④ICTの効果的な活用について

第2時では、自分が面白いと感じた角度や瞬間を選んで撮影した。タブレットを活用することで、児童は影の面白さを何枚も記録できるだけでなく、自分自身の視点やこだわりを記録に残すことができた。第3時では、児童が撮影した写真を電子黒板に映し出すことで、それぞれの感じ方や見え方を全体で共有する時間を設けた。このような共有の場では、「同じ材料でも見え方が全く違う。」「そんな工夫があったのか。」といった気付きが生まれ、児童同士の意見交換も活発になった。影の見え方が一人一人異なることを面白いと感じたり、友達の工夫を聞いて驚いたりしながら、活動を楽しむ姿が見られた。

第5学年 「心のもよう」

1 単元計画（全5時間）

時間	学習活動
1	形や色から気持ちを表す活動に関心をもち、絵の具を使った様々な技法を知る。
2	試しながら生まれた形や色を感じながら気持ちを結び付け、ミニカードを作る。
3	ミニカードを使って、アートゲームを行う。
4	ミニカードを自分が選んだ色の台紙に貼り、気持ちの構成を考えながら、「心」を表す。
5	タブレットを使って共有しながら、作品の鑑賞をし、よさや表し方の違いを感じる。

2 ねらい

- ・形や色などを通して気持ちを表す際の動きやバランス、色の鮮やかさなどの特徴を理解するとともに、これまでに身に付けた表現の技能や材料の特性を生かし、表したいことに応じた表現方法を工夫する力を養う。
- ・思いのままに表現する過程を通して、形や色、材料の特徴、構成の美しさなどに気付き、自分や友達の作品のよさや表現の意図を感じ取り、見方や感じ方を深める。
- ・主体的に形や色を用いて心を表す活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり、楽しく豊かな生活を想像しようとする姿勢を育てる。

3 学習活動の実際



4 成果と課題

①育成する資質・能力を明確にした指導計画の工夫について

本校の図画工作科に関するアンケート結果によると、本学年の児童は「自分の表現したいものを自由につくることは好きですか」という項目において、否定的な回答をした割合が15.1%と、他の項目に比べて高い傾向が見られた。児童の中には、大きな紙に描いたとき、失敗することによって不安や抵抗を感じている姿が見られることがあった。そこで第1時には、小さな紙にたくさん試して表現してみる活動を取り入れた。自由に試したもののなかで、自分のお気に入りのものを選び、作品に使用することで、失敗への不安が軽減され、表現への意欲が高まったことは一つの成果であった。また本題材は、9月に行った単元である。7月に宿泊学習を終え、友達との絆が一層深まった時期に、互いの思いや考えに触れながら学びを広げていく本単元の導入は意味があると考えた。児童が自ら描いた心のもようを起点に、友達との交流を通して、自己理解と他者理解を深めていくことを目指した。

課題としては、予想していた以上に、製作に時間がかかり、第2時と第4時については、1.5時間ほどかかったことである。もう少しゆとりをもった指導計画を組むべきであった。

②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について

第1時では、絵の具の技法を試しながら、形や色が気持ちに与える印象について関心を高める姿が見られた。児童は「にじみ」や「ぼかし」などの技法を使いながら、「ふわふわした気持ち」「ドキドキする感じ」など、感覚的な言葉で表現を語り始めた。技法の習得が目的ではなく、気持ちと結びつけることに重点を置いたことで、児童の主体的な活動が引き出された。第2時では、試しながら生まれた色や形を基にミニカードを製作し、第3時には、アートゲームを通じて友達と気持ちを当て合う活動を行った。「これは『さみしい』と思う。」「いや、私は『静か』って感じたよ。」といった対話生まれ、同じ作品でも感じ方が異なることに気付く場面があった。児童は自分の表現を言語化する難しさや向き合いながらも、友達の見方や考え方を受け入れ、考えを共有していた。第4時では、ミニカードを台紙に貼り、自分の心のもようを構成する活動を行った。児童は「この色は朝の気持ち。」「この形は友達とけんかした時。」といったように、自分との対話を通して、時間や出来事と気持ちを結び付けながら構成を考えていた。作品には個々の経験がにじみ出ており、自己理解と表現の深まりが感じられた。第5時では、タブレットを活用して作品を共有し、鑑賞活動を行った。児童は友達の作品に対して「この色の重なりが気持ちの変化みたい。」「形の向きが気持ちの流れを表している。」といった感想を述べ合い、友達との対話を通して、学びを深める様子が見られた。

一方で、課題も見えてきた。アートゲームでは、児童が感情を言葉で表すことに挑戦する姿が見られたが、次第に「行為」を表す言葉が混ざる場面もあった。これは語彙の不足というよりも、感情を言葉にする経験が十分でないことや、行動を通して気持ちを説明する傾向によるものと考えられる。中間指導では、感情語の例を提示したり、友達との対話を促したりすることで、児童が自分の気持ちを見つめ直すきっかけをつくった。今後は、感情語の幅を広げる支援や、安心して言葉にできる環境づくりを通して、児童の表現力をさらに育てていきたい。

③指導と評価の一体化の工夫について

一人一人が自分の心のもように向き合い、安心して表現に取り組めるよう、十分に試す時間を確保するようにした。第1時では、様々な色画用紙や描画材を用意し、児童が自由に線や色の組合せを試すことができるようにした。自分の気持ちをどう表すかを自由に探る時間を設けることで、児童は「こうしてもいいんだ」という安心感をもちながら活動に入ることができた。教師が様子を見て回ることで、表現に迷っている児童にも声をかけやすくなり、個々の思いやイメージを引き出す支援につながった。

活動の途中には、友達の作品を見て回る時間を設けた。児童は、友達の色使いや形の工夫に気付き、新たなアイデアを得たり、自分の表現に取り入れたりしていた。友達の作品に刺激を受けることで、表現の幅が広がるだけでなく、互いの心のもように関心をもつ姿も見られ、交流のきっかけにもなった。こうした時間を通して、児童は「自分の表現を見てもらえる」「友達の工夫をまねしてもいい」という安心感をもち、活動への意欲が高まっていった。



友達の作品を自由に見て回る様子

また、ロイロノートを活用して、全体で共有する時間も設けた。児童は友達の作品を見ながら、「この色の組合せが面白い。」「線の動きが気持ちを表している。」など、表現の面白さや工夫について話し合った。こうした対話を通して、自分の作品に新たな視点をもつようになり、「これからの活動では、もっとこうしてみよう。」と、表現をさらに深めていこうと意欲をもつ姿が見られた。

④ICTの効果的な活用について

第5時の鑑賞では、ロイロノートを使って、鑑賞し合う活動を行った。まずは、机の上に置かれた作品を児童同士で自由に鑑賞し合い、感じたことや気付いたことを言葉にする時間を設けた。その後、全体共有の場では、児童がロイロノート上で友達の作品の「みんなに見てほしい部分」に印（丸や矢印など）をつけて教員ファイルに提出し、鑑賞し合った。友達がどのように感じたかを手元の端末で見ることができたのは、とても有意義であった。友達の視点や考え方を知らずして、形や色の工夫、表現の意図により深く気付くようになり、新たな気付きが得られた。